

ずいそう

## 辺境の地に日本と結ばれた糸を見た

木本 公平



中央アジア・カザフスタンのセミパラティンスク市（以下、セメイと記述する）は西シベリアに位置し、文豪ドストエフスキーが流刑された辺境の町で、近くに大規模な核実験場があったことでも知られる。筆者は、円借款プロジェクトに参画し昨年までこの地に6年間滞在した。その間、思いがけない幾つかの日本とのつながりを見たので、その一端を紹介する。

この地と日本の最初のつながりは、20世紀初頭の大谷探検隊（西本願寺西域探検隊）の橋瑞超を挙げることが出来る。第三回大谷探検隊の瑞超は当時20歳の青年で短身瘦躯ながら、自分より年下のイギリス人の従僕とロシア人の通訳を引き連れていた。彼らはロシア北西部の都ペテルスブルグを汽車で出発後、イルティッシュ河を汽船で遡りセメイにたどり着いた。1910年のことである。当時のセメイの印象を「ちょっとした都会です。大阪付近で申せば住吉ぐらいでしょうか。ホテルもあれば商店もあります。けれどもこのホテルには風呂がない。これには私も甚だ困りました」と探検記に書いている。

橋瑞超の最初の訪問から87年後の1997年3月に、私達は建設コンサルタント業務を契約しセメイでの滞在を始めた。その時、首都アルマティの日本大使館から「セメイに住む婦人が日本人孤児だということで、いろいろ調査したが、手がかりが不十分で日本人孤児とは確定できない。しかし、生活に困っているようなので、助けてやって欲しい」との話があった。私達日本人が面接すると聞き、婦人は日本での調査の結果で身元がわかったのかと大いに期待したが、話が違ったのでがっかりしたらしい。当時、婦人は42歳で娘と息子の3人家族だった。面接の結果、私達は婦人を食事賄いとして雇用することにした。彼女が言う自身の生い立ちは、「昭和29年（1954）に樺太の恵庭で生まれた。両親は北海道から移住してきた日本人だが、相次いで亡くなったので2歳の時に朝鮮人夫婦に預けられた。日本人両親の名前は不明だが、本人の名前はリムラ・カシコだという（日露通訳の話では、ロシア語の訛りから推測して、木村かず子ではないかとのことだっ

た）。18歳の時にカザフスタン出身の軍人と結婚しセメイに来た」という。その後2度離婚し生い立ちから身についたのであろう、とても気の強い女性であった。

セメイ核実験場が1989年まで40年間も核実験を続けた影響が多くの人たちに被害を与えており、上述の一家も例外でなく3人ともそれぞれ治療や手術を受けている。このような被爆者を援助する人たちの中に、大学を退官後も草の根活動を続ける高木昌彦博士がいた。奥様は広島の実験場被爆者で、もとは高木先生の研究室の助手をしていたとのことだった。高木先生は70歳のお年からカザフ語の勉強を始めマスターされたという。いつも小さな民俗帽をかぶり、人懐っこい笑顔で飄々と歩く様子は、まさしく現地のお爺さん風であった。

現地では、8月6日になると多くの人たちが集まり非核の誓いを立て、風船や花を河に流して広島の実験場被爆者を慰霊する。かような離れた地でまことに有難く感動したものである。この集会で先生が壇上に上がり、遠慮がちに、しかし堂々とカザフ語で挨拶され、拍手喝采を浴びられたことが昨日のように思い出される。先生は、一昨年、日本帰国中、77歳で永眠された。合掌。

後日談だが、先生の死後まもなく、現地赴任中の筆者は思いがけなく中学時代の恩師から手紙をいただいた。そこには偶然この高木先生のことを書かれており、一時、医療関係の仕事で一緒したことがあるとのこと。恩師は高木先生の現地での活動もご存知だった。卒業以来、恩師との40年振りの通信であった。

セメイには日本から医学・医療をはじめとする関係者が援助に訪れ、カザフスタンからも多くの留学生や研修生が日本へ来て、結びつきは毎年強くなっている。この小文でとりあげたものよりもっと太く強い糸が数多くあるだろう。二国間の交流は、被爆市民を抱えるという共通点がひとつの大きな原動力になっている。筆者が帰国後、昨年夏から被爆地広島に勤務することになったのも、思えば不思議な縁である。